「"右翼"雑誌」の舞台裏

梶原麻衣子

『Hanada』『WiLL』はこうして作られる！

創刊・躍進・苦悩――日本一の「右翼雑誌」の歴史と功罪を元編集部員が語る！

花田紀凱編集長 独占インタビュー

第二次安倍政権で「応援団化」したのはなぜか

安倍政権を応援する保守が「反体制」を自認する理由

編集方針は「いい意味の無節操さ」

「朝日新聞へのカウンター」はいつまで機能する？

「右寄り雑誌」の知られざる読者像

「〝右翼〟雑誌」の舞台裏

梶原麻衣子

星海社

320

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

さかのぼること20年前の２００４年11月26日、花田紀凱氏が編集長をつとめる月刊誌『ＷｉＬＬ』（２００５年1月号、ワックマガジンズ、後にワック）が創刊された。

『ＷｉＬＬ』は保守系の月刊誌として、朝日新聞批判特集、中国・韓国特集、歴史認識特集などを組んできた。その後、２０１６年に『ＷｉＬＬ』は分裂し、花田編集長以下、編集部は『Ｈａｎａｄａ』を創刊するに至る。筆者は、その両方で編集部員として雑誌作りに携わってきた。本書は、その経験を元に「保守雑誌、右派雑誌とはどういうものだったか」「中の人は何を考えていたのか」をつづったものである。

創刊当初、『ＷｉＬＬ』は3号雑誌、つまり3号であえなく廃刊になるのではと揶揄された保守系雑誌だったが、４号目の〈朝日新聞を裁く！〉（２００５年4月号）が大当たりし、以降、公称10万部まで部数を伸ばす。

筆者はこの４号目からの購読者で、当時はＩＴ系企業に勤めるシステムエンジニア兼プ

ログラマーだった。２００５年に花田編集長が始めたライターや編集者を養成する講座「マスコミの学校」を受講し、その際に受講生として提出した企画をもとに、２００５年７月号に〈日本を取り巻く「ドラえもん」の世界〉という記事が『ＷｉＬＬ』に掲載された。

その後、たまたま編集部員が一人退職することになり、晴れて『ＷｉＬＬ』編集部員となった。会社員の肩書で雑誌に記事を載せてはもらえたが、編集経験もライター経験もない、全くの素人だった。それでも入社となったのは、受講生の中でも筆者がとりわけ「右寄り」だったためである。受け入れる側の編集部では「今度来る新人はとんでもない右翼らしい」とささやかれていたという。

以降、２０１６年４月の雑誌分裂騒動による飛鳥新社への移籍、『Ｈａｎａｄａ』の創刊（２０１６年６月号）を経て、２０１８年９月末まで編集部に在籍。病気を患って休職しながらも半年ほど編集後記は書き続けたが、２０１９年３月に退職し、その後フリーとなって現在に至る。

大学時代から『諸君！』（文藝春秋）『正論』（産経新聞社）『ＳＡＰＩＯ』（小学館）を読んでいた右寄りの筆者にとって、『ＷｉＬＬ』『Ｈａｎａｄａ』編集部員という職業は、まさに天職のように思えた。その後、様々な苦悩に見舞われることになるのだが、この20年、少なくと

も筆者が編集部に在籍した13年あまりは、国内政治では二度の政権交代や集団的自衛権をめぐる大論争、国際政治においては中国・韓国との摩擦の高まりやトランプ政権の出現など、激動の時期に重なる。国民意識も大きく変化した時代だ。いつの時代もそうかもしれないが、実に「面白い」経験をしたと思っている。

世間で右傾化が指摘されるようになってから、右派分析の書籍なども様々刊行されている。学者の精緻（せいち）な分析に基づくものももちろんあるが、右派側にいた人間としては、経験とのずれ、見聞きしたこととの齟齬（そご）を感じるものもなくはない。

本書でも触れているように、２０１４年頃から「ヘイト本」批判なども出てきたが、２０２４年現在ではいわゆる「嫌韓・反中本」の刊行が減ってきた（売れなくなってきた）こともあってか、右寄りの出版物に対する言及や分析はしぼみつつある。

２０１５年には『諸君！』『正論』『ＳＡＰＩＯ』とまさに筆者が愛読してきた各誌の新聞広告を研究した能川元一（のがわもとかず）・早川タダノリ（はやかわ）『憎悪の広告』（合同出版株式会社）が出版されているが、残念ながら『ＷｉＬＬ』『Ｈａｎａｄａ』は考察対象外となっている。

また、論壇研究で言えば、２０１０年代末頃までの分析は目にすることができたが、『ＷｉＬＬ』や『Ｈａｎａｄａ』については言及が少なく、その後雑誌や執筆者から支持を受

けてきた安倍政権や、影響力の大きい執筆者を分析したものにシフト。右派分析の中心は雑誌や出版物ではなくウェブに移行し、欧州の極右台頭と絡めたものも出始めている。

などと「先行研究」を並べるがごとく書いているが、本書は学者の手になるものではなく、筆者が在籍した２００５年11月から２０１８年９月までの編集部の様子や、それを取り巻く保守のあり方、読者の様子など書いたものだ。右派雑誌の内側の「空気」を、本書で知ってもらえればと思う。また「あんな右派雑誌を10年以上も作っていたなんて、一体どんな奴なんだ」といった興味関心からお読みいただくのでも、もちろん大歓迎だ。

なお、本文中の『ＷｉＬＬ』は基本的には花田編集長時代（２００５年１月号から２０１６年５月号まで）を指し、『Ｈａｎａｄａ』創刊後は「分裂後の……」などと表記する。なお、本書のタイトルは『「〝右翼〟雑誌」の舞台裏』となっているが、筆者の認識に基づき、本文中では「右派（雑誌）」などとしている。

両誌の論調に否定的な向きはもちろん、内部事情を知る関係者からさえ「自己弁護ではないか」と言われるかもしれないが、一編集者の体験記ととらえていただければ幸いである。

目次

はじめに 3

第1章 「右翼雑誌」はこうして作られる 13

編集方針は「いい意味での無節操さ」 14
右翼だけでなく、リベラルも多数登場する誌面の多様性 18
大新聞の権威へのカウンターとしての「反朝日新聞」 21
週刊誌の作法で保守月刊誌を作ったらヒットした 23
校了直前のデモまで報道するスピード感 27
聞き書き主義の三つのメリット 31

花田スタイルのしわ寄せは編集部に 36
煽るだけでなく、細部の面白さまでこだわるから売れる 39
「安倍晋三推し」にもつながる人物エピソード重視 41
レジェンドと新人が自由闊達に議論を交わせる編集部 44
毎月が文化祭前夜 48

第2章 ゲリラ部隊は正規軍にはなれない 49

メディア状況の変化　背中を追いかけていたはずの先行雑誌が次々と消えていく 50
老舗保守雑誌が衰退する中で台頭する『ＷｉＬＬ』 53
「右傾化した若者代表」になる寸前だった 56
後追いの右翼雑誌は『ＷｉＬＬ』に勝てず 60
『ＷｉＬＬ』一強への不安 62
「既存勢力へのカウンター」というスタンスの危うさ 64

第3章 「最強のアイドルにして悲劇のヒーロー」 安倍晋三

保守派のアイドルにして花田編集長の「推し」 72
「世襲だからこそ」 76
第一次安倍政権退陣後は「推し」ではなかった 80
第二次安倍政権で雑誌が「応援団化」した理由 82
メディアが過熱した集団的自衛権とモリカケ問題 84
事実関係より「安倍批判」「安倍擁護」が先行した報道 87
弱いからこそ支えたくなるアイドル性 92
安倍晋三亡き後、「親安倍」も「反安倍」も軸を失った 96
安倍と共に去りぬ 99

第4章　ピンからキリまで　「右翼雑誌批判」の虚実　103

右派雑誌はどう見られていたか　104
「保守の意見を日本社会は理解してくれない」という意識　107
「ヘイト本批判陣営」との対話　114
右にも変わるべきところがある　117
安倍政権を応援する保守が「反体制」を自認する理由　122
右翼団体のトップからの抗議も　127
皇室と原発をめぐる執筆陣同士での論争　130
元朝日新聞編集委員との対話も　133
原発事故では是々非々の議論で読者に寄り添う　134
意見の異なるもの同士の対話は難しくなる一方　135
ＳＮＳではなく、雑誌だからこそ陣営間の対話ができた　138

第5章 読者との壮大な井戸端会議 141
女性読者から多数の投書が届いた皇室問題 143
平成末期の「天皇抜きのナショナリズム」 147
読者との双方向性 148
常連投稿者を『世界』で発見 151
編集後記にも連絡が 154
「安倍一辺倒はおかしい」の指摘 157
右派雑誌読者への偏見 160
あまり思い出したくない分裂騒動 162
論調以前に情報の正しさを 164

第6章 『Hanada』編集長が考えていること　花田紀凱氏インタビュー 167
おわりに 196

第1章 「右翼雑誌」はこうして作られる

編集方針は「いい意味での無節操さ」

『ＷｉＬＬ』や『Ｈａｎａｄａ』に在籍していたと自己紹介すると、必ず言われるのは「結構なところにいらっしゃったんですね」というコメントだ。何がどう結構なのか、もちろん誰も明確には言わないが、当然ながら論調のことを指している。論調についての言及と言えば「尖（とが）っている」「過激」ならば配慮のある方で、「極右」「嫌韓・反中本」「情緒丸出し」「売らんかな主義」などの否定的表現も少なくない。

「その編集部の中でも、思想的に私が最右翼でした」と加えるとさらに相手の表情は引きつるわけだが、確かにかつての特集タイトルを見ると、振り切ったものが多い。時代を経て、背景情報を抜きにしてタイトルの字面だけを見ると、「編集部内でも最右翼」の筆者でも今となってはギョッとするものもないとは言えない。

例えば２０１２年12月号の特集名〈哀れな三等国、韓国〉などは、なぜこの表現になったかを釈明することはできるが、それにしても今見るとやり過ぎの感もある。

これには第４章で後述するような社会背景もあり、また先行する『諸君！』や『正論』にも同様の傾向のタイトルがなかったわけではないのだが、よりキャッチーなタイトルになったのは、ひとえに『ＷｉＬＬ』や『Ｈａｎａｄａ』両誌を創刊した編集長・花田紀凱

が週刊誌の編集長だったことが影響しており、その週刊誌ノリを持ち込んだことに由来する。

さて、その雑誌の作られ方だが、編集部員が月に一度の企画会議にプランを複数提出し、編集長が選別して執筆者に依頼、記事ができて掲載されて、発売されるというもので、その点は他誌と変わらない。

もちろんその企画自体が「右に偏(かたよ)っている」のはそうだが、だからと言って編集部を挙げて毎日・毎月靖国(やすくに)神社に参拝したり、編集部内に国旗が掲揚(けいよう)されたりというようなことはもちろんない（筆者が個人的に靖国に行くことは多々あったが）。毎朝社員が神棚に手を合わせる習慣を持つ会社もあるが、右派と言われる編集部にそのような習慣はなかった。

当然、筆者を含め右寄り・保守派という編集部員もいたが、多くの時期において編集者の少なくとも半分はノンポリ、あるいは教条(きょうじょう)主義的な左派は好まないがどちらかと言えばリベラル寄り、といった具合の政治思想の持ち主もいた。

花田編集長は特に誤解されがちで、文春時代を知る人の中には「どうしてあんなに右旋回したのか」と嘆く人もいる。だが、政治思想云々(うんぬん)以前に、第一に「面白い雑誌を作りたい」、第二に「読者に喜んでもらいたい（＝売りたい）」というのがポリシーであり、それは現在まで変わらない。本人を直に知る人で編集長をガチの保守や右翼だと認識している人

は皆無であろう。

ガチの保守や右翼であれば、当時、『ＷｉＬＬ』に連載していた秋元康氏と、小林よしのり氏、ＡＫＢ48のメンバーだった柏木由紀氏の鼎談に、〈ＡＫＢ48は大東亜共栄圏!?〉（2012年2月号）などというタイトルをつけることは許さなかっただろう。

確かに花田編集長は２０１２年末以降、安倍晋三元総理のファン、つまり「安倍推し」になり、それが誌面に反映されたきらいはあるものの、自身は右翼的な思想はほとんど持っていないというのが、十数年部下として働いてきた「右寄り」な筆者の感触である。

年齢を重ねて「日の丸ってきれいだな」と思うような情緒は抱くようになってきた面はあるだろうが、基本的に教条主義的な右翼、あれこれと「こうであるべし」を説く説教臭い保守という要素は全くない。

花田編集長の産経新聞の連載「花田紀凱の週刊誌ウォッチング」をお読みいただければわかるが、現在、最も好きな雑誌は国際情報誌の『Newsweek日本版』と見られる。もともと、雑誌編集者を志したのも『ＬＩＦＥ』誌に魅せられたからで、ゆえに『ＷｉＬＬ』『Ｈａｎａｄａ』のロゴは赤地に白抜き文字なのだ。

編集方針についてもあくまでもジャーナリズムという観点から、保守派の論調との接点

がある、というのが実際のところだ。そこで「反朝日新聞的」というスタンスは出てくるのだが、これについては後述する。その点でも、雑誌作りのポリシー自体は変わっておらず、それを「右にも適用した」ということではないか。

雑誌で展開している思想（志向）と仕事がピッタリ一致しているわけではないのは、おそらくどの編集部・編集者でも同じではないだろうか。一定の傾向や得意分野はあるにせよ、「自分の意見とは違っても、面白い見方を許容する」のが本来の（雑誌）編集者のあるべき姿でもある。

ある時期までの筆者のように、「自分の思想と、仕事上扱っているものが一致している」ことは幸せなことだが、一致しているだけに少しでもずれてくるとこれは苦痛になってくる。一方、初めから仕事だと割り切っていれば、公私の別はつけやすくなる面もあるのだろう。

花田編集長はガチの保守・右翼ではなかったがゆえに、『ＷｉＬＬ』時代にはほかならぬ保守派から批判されることも多々あった。例えば、天皇の皇位継承問題で、「女系天皇」を否定しない（あってもよいとする、あるいは男女の別なく直系を優先する）容認論を掲載していたからだ（２０１０年９月号、小林よしのり氏の〈本家ゴーマニズム宣言　愛子様皇太子論〉

など)。執筆陣には男系論者も多いため、そちらの意見も載るが、特に『正論』には女系容認論は掲載されないため、寄稿先を求める執筆者からのアプローチが増えた事情もある。

それでも、自身が男系絶対論者であれば女系(容認)論は掲載しないわけで、女系論者にも誌面を提供してきた花田編集長の編集方針は、ある保守系論客から「いい意味での無節操」と揶揄されることもあった。

右翼だけでなく、リベラルも多数登場する誌面の多様性

ジャーナリズムと保守派の接点として『WiLL』『Hanada』のメインとなり、最も得意としてきたのは、これも文春以来の「反朝日新聞的姿勢」だ。

『WiLL』は、発売直後は部数が振るわず、「3号雑誌(3号で休刊になる雑誌)」とささやかれたこともある。それが大ブレイクしたのが、4号目(2005年4月号)の朝日新聞批判特集だった。当時筆者は読者の立場だったが、鮮烈な印象を受けたのを覚えている。すでに『諸君!』や『正論』で再三にわたり朝日新聞の批判は展開されていたが、やはりこれらとはどこか違う、企画の立て方、タイトルのセンス、読みやすさなど様々な点で新鮮さが感じられるものだった。『諸君!』『正論』にも老舗(しにせ)の良さはあったのだが、後発の『W

ｉＬＬ』は筆者にとってまさに「自分の雑誌」だった。

朝日特集でブレイクし、その後も朝日批判が大きなテーマの一つとなる『ＷｉＬＬ』だが、創刊前の花田編集長は一時とはいえ朝日新聞社に在籍したこともある。これまた「無節操」と評されそうだが、ここが雑誌人の面白いところでもある。当時、朝日社内からは「なぜあんなに朝日を叩いてきた人を入社させるのか」との声もあったそうだが、その意味では移籍した花田編集長も、受け入れた側の朝日新聞も、なかなか融通無碍で面白い時代だったのだろう。

それは雑誌の誌面にも反映されていた。

２０１５年3月号の〈わが体験的メディア論〉には、『ＷｉＬＬ』の天敵・朝日新聞出身の轡田隆史氏がコラムを寄せている。

〈アサヒという響きを耳にしただけでも、血相変えて「売国奴」だなんて叫ぶ人もいる世の中らしいけれど、まあ落ち着いて、湯豆腐でも、ゆったりと突きながらの気分でやろうじゃありませんか〉

身構える読者の姿勢を崩させてから、コラムを次のように結んでいる。

〈さて最後のひとこと。この国にとってアサヒはやはり大切な、なくてはならない存在だ

と信じています。『ＷｉＬＬ』がそうであるのと、全く同じことです〉

あるいは『ＷｉＬＬ』の連載陣にも、右でないだけでなくリベラル、左翼としか言いようがない執筆者が名を連ねていた。

その最も象徴的な存在が、元『噂の真相』編集長の岡留安則氏だろう。学生運動の闘士だった岡留氏は、創刊号から3年にわたって、『ＷｉＬＬ』に連載していたのである。どこからどう見ても特集の傾向とは相容れない思想の持ち主だが、花田編集長との個人的な付き合いから掲載されていた。

この連載に対して読者から「なぜこんな連載が掲載されているのか」との指摘が来たこともなくはなかったが、いわゆるクレームや、極端な言い方で排除を求めるようなもの、不買をちらつかせるようなものは記憶にない。ほかにも連載陣にはオバタカズユキ氏やいしかわじゅん氏など、やはりどう見てもリベラル（左派）、あるいは少なくとも右では全くない、という執筆者がそろっていた。また『Ｈａｎａｄａ』になってからも、「右派」とは全く無関係の連載陣が雑誌の脇を固めている。

在日韓国人の執筆者や、韓国・中国出身者、その後日本国籍を取得した執筆者も登場している。ある在日韓国人の執筆者は、「自分のように在日同胞に対しても時に厳しいことを

書いたり、歴史問題について日本側の言い分を批判しなかったりする私のような書き手は、リベラルの媒体では書かせてもらえない」と言っていた。一定の方向性というのはあるが、必ずしも「画一的な保守・右派だけの排他的な雑誌」ではなかったのだ。

読者は、様々な感想を抱きつつも多様な執筆者の、多様な意見が掲載されている状態を支持していた（少なくとも許容していた）のである。むしろこれこそが、雑誌の醍醐味だろう。

大新聞の権威へのカウンターとしての「反朝日新聞」

それにしても、なぜ朝日新聞をこうも目の敵にするのか。創刊初期の朝日新聞批判特集のタイトルをいくつか並べてみても、〈朝日は腐っている！〉（2005年11月号）、〈許すな！　中国と朝日〉（2006年2月号）、〈朝日新聞の大罪〉（2008年9月号）と穏やかでない。

これは花田編集長が文藝春秋社に所属していた頃からの考えに基づく「雑誌は大メディアのカウンターであれ」という思想から来ている。雑誌の役割は、テレビや新聞のような大メディアが取り上げない視点を取り上げ、疑問を呈すことにある。新聞は社会の公器、社会の木鐸として政権や行政の監視を一つの役割としている。テレビもそうだろう。しか

し新聞やテレビのようなマスメディアには絶大な影響力があり、第四の権力とも呼ばれる。そうである以上、マスメディアを監視する役割を誰かが担う必要がある。雑誌こそがまさに、その役割を担うという認識だ。

「喧嘩を売るなら、でかい相手がいい」と朝日新聞を批判していた面もある。それで実際に訴訟になって大変なことにもなったのだが、これは新聞・テレビが情報発信の多くを担い、ネットメディアやSNS、動画サイトなどが出現する以前の、「大メディア」が存在していた頃の名残でもあった。

その中でも朝日新聞は、特に既存の権威の象徴であった。大勢が読んでいるだけでなく、特に知的エリート層が好んで読み、識者や執筆者として登場するためである。それを庶民の目線から批判するのが花田編集長のスタンスだ。文春時代はそうした視点からの批判であったろうし、『WiLL』になってからは政治的スタンスの異なる保守からの批判という側面をより強めたことになる。

こうした「色」になるのは、ひとえに読者層に合わせて企画や記事の取り合わせを練っているからに尽きる。花田編集長は、もともと「朝日新聞のカウンター」的な発想は持っていたが、『WiLL』4号目にしてこの企画が大当たりし、「なるほど、保守系の雑誌と

はこういう風に作ればいいんだ」という手ごたえを感じたに違いない。

ではいつまで、その「大メディアのカウンター」が機能するかという点については第4章で触れるが、2024年現在、『Hanada』ではしばらく朝日新聞批判特集が組まれていない。連載を含め、毎号なにがしか朝日新聞を突く記事は掲載されているが、トップで朝日特集を銘打ったのは、2019年9月号の〈ざんねんな朝日新聞〉が今のところ最後となっている。

朝日新聞の質が変わり、批判すべき記事、突っ込むべき論調が減ったのも理由の一つかもしれない。あるいは安倍政権終焉以降、特集を組むほどの対立軸がなくなったのかもしれない。安倍政権期という朝日新聞と保守派が激しくやり合った時期を過ぎ、朝日新聞の部数が減って世帯当たりの購読数が0・5部を下回る（つまり朝日新聞を購読している世帯は半分以下になった）ここ数年で最も朝日批判が盛んだったのは、他でもない安倍元総理の国葬儀の賛否をめぐってのものだった。これは実に象徴的であろう。

週刊誌の作法で保守月刊誌を作ったらヒットした

それにしても、朝日新聞批判や、2010年代まで多く特集されてきた歴史認識問題、

中国や韓国との外交問題などは、先行する保守系雑誌である『諸君！』や『正論』でも長年にわたって取り上げられてきたテーマである。その中で、いくらタイトルがキャッチーだからと言って、それほど他誌との差別化が図れるのかという疑問はある。実際、両誌と一緒に購読している読者は少なくなかった。

ではなぜ、『ＷｉＬＬ』は創刊から数年で、雑誌では異例の増刷が何度もかかったり、公称10万部に達するなど一気に2誌の部数を抜き去ることができたのだろうか。

他誌と違う特徴として、タイトルなどのほかに考えられるものを挙げてみたい。まずは編集スピード。通常、雑誌（特に月刊誌）は特集が決まり、ラインナップとページ数が決まり、台割ができてから動き出すものだという。「という」というのは、『ＷｉＬＬ』や『Ｈａｎａｄａ』では「校了直前に台割が決まる」ものだったので、他誌が事前に特集も掲載記事もページ数さえも決まった状態で寄稿依頼や取材が始まると聞いたのは、この業界に入ってしばらく経ってからのことであった。

ある雑誌の編集の場合、「2号先まで特集が決まっていて、その下準備は2か月前から始まっている」と聞いた時には驚いたものだった。

『ＷｉＬＬ』と『Ｈａｎａｄａ』の場合、発売直後に次号の特集や取り合わせを決める企

画会議が開かれる。しかしその時決まったラインナップが、そのまま実現されることはまずない。発売は約1か月後になるわけで、その間、どんな出来事が起きるかわからないからだ。

どの雑誌でも、突発的に重大な事件や出来事が起きた場合には記事の差し替えや特集の組み換えが行われると思うが、『ＷｉＬＬ』や『Ｈａｎａｄａ』の場合は、それが平常運転なのである。要するに「もっと面白い記事があったら当初の予定など無視してそちらを載せる」「ページが足りなくなれば一部記事は翌月（以降）に繰り越す」のである。これも、おそらく文春時代からの花田編集長のやり方なのだろう、ためらいがない。

執筆者の方々には大変申し訳ないことなのだが、そういうわけなので「新しい原稿」は、時に掲載できる本数（ページ数）の1・5〜2倍程度集まってしまう。執筆者がゲラをチェックした後、掲載された原稿を見たら10ページだったものが8ページになっていた、ということさえある。載せたい記事が多すぎて、ページが足りなくなったために削って押し込むという荒業（あらわざ）を繰り出すためだ。連載でさえ犠牲（休載）になるときもままある。

そしてその「面白い記事」「売れるラインナップ」の模索は校了直前まで続く。重大な出来事が起きなくても、当初の予定通りの特集で進んでいたとしても、編集長が「何か一味

足りない」と思えば新しい記事が差し込まれる。もちろん、編集者が提案することもある。校了まであと3日、という時期に差し掛かっていたとしても、だ。

「それはいい案だな。自分の首を絞めることになるけど、やるか？」

そんな編集長とのやり取りが、これまでに何度あっただろうか。編集者の悲しいサガで、思いついてしまった面白いアイデアは話さずにはいられないし、やるとなったらやっぱりやってしまうものなのだ。

後述するように、『ＷｉＬＬ』や『Ｈａｎａｄａ』にはインタビューや聞き書きが多いのだが、これが「直前に記事を差し込む」ことができる理由の一つでもある。思いついてしまったから、というだけでなく、これなら厳しいスケジュールでしか取材に応じられない相手でも、なんとか記事をねじ込むことができるのだ。

かなりきわどいケースとして、筆者も「安倍総理と聞き手の対談を某日夕方に実施し、次の日の朝に著者チェックを経て昼に校了する」という強行軍を担当したことがある。やればできてしまうので、また次にも「校了前日までに取材すれば間に合う（間に合わせられる）」という破綻したスケジュールの作業が差し込まれることになるのである。

そのため、作業量は膨大なものとる。以前は1週間から10日前後の終電帰りと最終日の

徹夜作業を繰り返していた。２０２４年現在、花田編集長は82歳となり、さすがに徹夜・始発帰りはしなくなったものの、それでもほぼ毎月、数日間の終電帰りと校了最終日の午前様帰りを繰り返している。汲々（きゅうきゅう）とならずに済むよう、作業進行を調整すべきとの声は20年前から絶えないが、「最後の最後まで面白い記事をねじ込むために作業を行う」ためにどうしてもそうなってしまうのだ。

校了直前のデモまで報道するスピード感

だが、このスピード感が編集には必要不可欠でもある。読者は今起きていることがどういうことであるのか、早く知りたい。ネットの速度には当然、勝てないが、かと言って月刊誌の時間軸だけを優先しすぎれば、読者の手元に届く頃にはピンボケした論点になってしまいかねない。もちろん腰を据えた長いレンジ（射程）の、賞味期限の長い特集や原稿であることに重きを置いている場合はそちらを優先すべきだが、週刊誌スタイルが基本にある花田編集長の場合、やはり鮮度は外せない要素だったのだ。

それは毎号の雑誌だけでなく、年に数回刊行されていた増刊号でも同じだった。出版社によっては増刊号は通常号と別の編集スタッフが手掛ける場合もあるようだが、『ＷｉＬ

L』や『Ｈａｎａｄａ』の場合は、通常号のメンバーがそのまま増刊号も作っていた。今考えると恐ろしい作業量だが、出すとなればすでに発表された記事の再録だけでなく、新しい記事も欲しくなる。大きな話題であればあるほど、「今」の情報がどうしても必要になる。

例えば、２０１０年10月14日に刊行された『ＷｉＬＬ』「緊急増刊 侵略国家中国　守れ、尖閣諸島！」（10年11月号）。これは２０１０年９月７日に発生した尖閣諸島沖中国漁船衝突事件を受けて企画されたものだ。

事件発生から数えれば発売までに１か月あるように見えるが、この間に通常号が１冊、刊行（２０１０年９月25日発売の11月号）されたうえでの増刊号だ。通常号の作業が９月20日前後に終わってから、２週間余りの間に編集・校了、印刷所に入稿し、刊行している。

中には校了直前の10月２日に行われた都内での「尖閣デモ」のレポートまで掲載されている（執筆者は山際澄夫氏）。ほとんど週刊誌レベルの取材・執筆・編集スピードと言っていいだろう。

しかも通常号の作業も毎度の終電・徹夜コースだったことを考えると、ほぼ半月あまり休みなしで編集にあたっていたことになる。だが、これも「鮮度があるうちに読者に読ん

でもらいたい」との一心からやっていることであった。何より、花田編集長に「いい案があるんだけど」と言われたら、休日返上を覚悟せざるを得ない。

それを「大きな話題になっているから、早く出せば売れる」と言い換えてもいいが、売らんかな主義と言われても、売るための作業は相応に厳しいものでもあったのだ。

「出版界の蟹工船」――筆者が担当していた連載「あっぱれ！　築地をどり」の執筆者である故・勝谷誠彦氏は、『ＷｉＬＬ』編集部の働きぶりをこう評したものだった。「右派なのに小林多喜二とはこれいかに」ではあるが、筆者はこのフレーズが気に入っていたのでよく使っていたし、今も当時の働きぶりを説明する際には使わせてもらっている。

勝谷氏はもともと『週刊文春』『マルコポーロ』時代に花田編集長の部下として働いていたため、筆者にとってはいわば「兄弟子」のような存在だ。かねて「元日に文藝春秋社の編集部に顔を出したら花田サンがいた」と懐かしく語っており、さすがに月刊誌だけにこちらはそこまで極端な状況ではなかったが、「蟹工船」という表現には、労働の過酷さだけではないもう一つの意味が含まれていたことは示唆しておきたい。

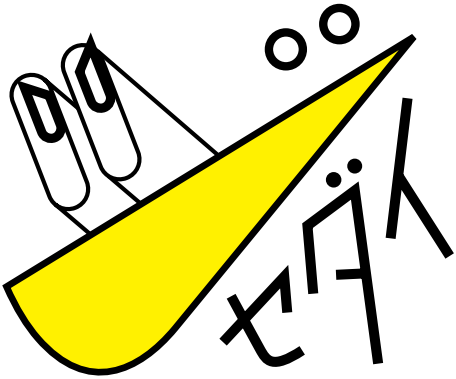
編集部からは死者こそ出なかったが、ストライキ闘争が画策されただけ「蟹工船」の方がマシだという評価も含まれていよう。

側聞するところによると、労働条件の悪さで言えば、右の『ＷｉＬＬ』編集部か、左のリテラ編集部かという状況だったらしいことも付け加えておきたい。『ＷｉＬＬ』もリテラも特に安倍政権期に数字を伸ばしていたが、内実は劣悪な環境下にありながら、互いにイデオロギー闘争を展開していたことになる。

過酷な労働環境は人を政治闘争に駆り立てるのかもしれない。自らの不遇に対する不満や不安を政権にぶつけるか、高給取りのメディア（関係者）や対外勢力にぶつけるかの違いがあるだけの相似形だった可能性がある。

『Ｈａｎａｄａ』創刊時には飛鳥新社に移り、会社の体制自体は格段によくなったが、編集部の働き方そのものはさほど変化がない。通常号・増刊号・書籍の編集という従来の仕事に加え、時代の流れに沿って動画やウェブメディア、ＳＮＳの運用、「Ｈａｎａｄａ新書」と銘打ったシリーズの刊行などもある分、作業は増えている。

なぜか編集長は元気そのものだが、筆者を含め編集部員は病に倒れることもあり、なかなかのサバイバル状況に置かれていた、まさに蟹工船だった。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!